

学位請求論文の内容の要旨

氏名：山本興一郎

専攻分野：博士（文学）

論文題目：古代ローマ共和政終焉期・帝政草創期の表象と政治
—「故ユリウス・カエサル」の利用を軸に—

本研究の目的は共和政終焉期から帝政草創期における表象「故カエサル」の利用について検討することである。前44年3月15日、終身独裁官C.ユリウス・カエサルはC.カッシウス、M.ブルートゥスらに暗殺された。暗殺後の後継者争いに勝利し、共和政終焉期の混乱に終止符を打ったカエサルの相続人且つ養子オクタウィアヌス（後の初代皇帝アウグストゥス）は、後14年に没するまでに新たな政治体制＝帝政を創始した。アウグストゥス及び彼が創始した帝政に関する研究に際して、生前の養父カエサルと彼の事績は常に大きな関心を集めてきた。しかし暗殺後の言わば表象としてのユリウス・カエサルに関しては、直接の研究対象としてあまり扱われていない。なお、申請者は暗殺後の表象としてのカエサルを「故カエサル」と便宜上呼ぶこととする。「故カエサル」に関連した皇帝礼拝研究やカエサルの遺言、名乗りに関する研究においても、多くは暗殺～前42年神格化確定迄に関心が集中している。以後「故カエサル」はオクタウィアヌス自身の神聖化の文脈で、或いは新しい時代の象徴の一つとしてしか言及されなくなり、研究者の関心はその他の諸神利用や「アウグストゥスの宗教復興」等に移ってしまう。

だが帝政成立に大きな影響を与えた「暗殺後」について、その存在がカエサル後継候補者達にどのような影響を与えたのかを検討しなくては、帝政について、特に「ローマ皇帝」像形成過程について、十分に検討されていないことになるのではないかと考える。そこで、申請者は従来研究では主軸として扱われることが少なかった暗殺後から前30年内乱終結と戦後処理前後迄を対象とし、表象「故カエサル」の利用のされ方について研究を行う。その際、オクタウィアヌスによる利用の検討を軸としながらも、彼の敵対者、競争者らによる「故カエサル」に対する姿勢、対抗軸となりうる表象利用・相互作用をもあわせて検討することで、この重要な時期を、表象という観点から考察することができると考えている。以上の課題と目的を踏まえて、本研究は当該時期を重要な出来事毎に分け、全4章構成を取る。

I章では、カエサル暗殺直後の混沌とした状況下で、カエサルを失った政界の有力者達が如何なる行動をとったのか、故カエサルは如何に利用されたのかを、前42年カエサル神格化確定・暗殺者達との決戦迄を対象として考察した。暗殺後、まず故カエサルを利用したのはM.アントニウスであった。彼は亡きカエサルの公文書の存在を利用して、カエサル断罪と自身の地位喪失を防いだ。更に公葬での追悼演説、故カエサルの決定や文書に由来する公職や法施行の面を軸に故カエサルを利用し、政治の主導権を握ろうとした。次に偽マリウスは支持勢力獲得のため、カエサルとの血縁関係を主張し、カエサル火葬の場に祭儀を伴う記念物を創始する。この動きは偽マリウス亡き後も「下」からの動きとして継続し、火葬場の記念物の是非は、故カエサルの是非を図る一つの印として認識されていく。そして遺言により相続人に指名されたオクタウィアヌスは、ローマ市帰還後、支持勢力獲得のため相続人・「息子」としての行動で故カエサルを利用した。彼に目を付けたのがM.キケロで、彼は政敵アントニウスの故カエサル利用の矛盾点を批判し、逆に提携相手のオクタウィアヌスを称えた。結果、利用されたはずのオクタウィアヌスはキケロの権威によって公的な立場も獲得し、カエサル派指導者、カエサルの養子と承認され、勢力拡大の機会を得た。次いで第二回三頭政治の成立、カエサル神格化確定により、上述の人物達を中心とした多様な公式・非公式の「故カエサル」利用は、暗殺者達（被公権剥奪者）と対決するために、三人委員の下で、確認・変化・追加され、公式の象徴「神なるユリウス」という枠の中で整理・統制された。

II章では、神格化確定後、初のカエサル派同士の争いであるペルシア戦役と関連する和解交渉に注目し、その過程で如何に故カエサルが利用されたのかを考察した。フィリッピの戦い後、退役兵への土地分配政策に端を発したペルシア戦役時において、オクタウィアヌスは新たに「神なるユリウスの子」の立場や、暗殺関連者を裁く公権剥奪等あらゆる面で故カエサルを利用していた。対戦相手L.アントニウスらは遺言公開前のオクタウィアヌスの立場を連想させうる名「Octavius」、「Octavianus」を飛び道具に記して使用し、カエサルの息子・後継者という彼の主張を否定しようとする。そしてM.アントニウスはオクタウィアヌスによる利用の限界を指摘することで、彼の大義名分に揺さぶりをかけた。つまり敵対者はオクタウィアヌ

スの力・正当性を奪うための手段として、彼の故カエサルとの繋がりを弱める・否定する主張や行動をとった。又旧カエサル指揮下の軍団同士では同士討ち忌避の傾向があり、それへの配慮が必要な点、故カエサル尊重姿勢維持が前提となる点等、時に利用者の行動を制限する事態も生じている。つまり故カエサルは後継候補者達の行動正当化の源泉や競争者攻撃の手段として利用され、又利用者の行動をある種制限する存在として、当該期の有力者間の対立において影響を与えていた。

Ⅲ章では、カエサル派と対立した兄 Gnaeus と弟 Sextus のポンペイウス兄弟による、亡き大ポンペイウスの表象利用に注目した。特に父が名乗った Magnus の使用動機と定着過程、息子達による利用を検討し、その上で敵対したオクタウィアヌスほどのように故カエサルを利用したのかも合わせて検討した。まず大ポンペイウスは自らアレクサンドロス大王を準えた名 Magnus を名乗り、名の順も praenomen の位置に据えようとしていた。兄は Magnus と共に Pietas を新たに使用し、故カエサル利用に先行して表象としての故ポンペイウスの利用を始めた。弟は唯一の後継者として、官職や権限の明示による正当性主張とともに、段階を踏みつつ、名の順を変更し、貨幣発行等を通じて亡父の意思をより明確に示そうとした。それが Magnus Pompeius Pius という一目でアレクサンドロスに準えた亡父を連想しうる名である。このように兄弟は名乗りに代表される父由来のものを臨機応変に利用していた。Sex.ポンペイウスに苦戦するオクタウィアヌスも、官職や権限明示による正当性主張とともに、生前の養父への決定を根拠としつつ、段階を踏み、Magnus 使用にも刺激されて、praenomen の位置で Imperator の使用を開始したと考えられる。そしてポンペイウス戦勝利及びレピドゥス失脚を経て、カエサル派指導者としての実績を上げていく。以上のように、本来十数種類しかない praenomen に両者はそれぞれ Magnus と Imperator を名として据えた。まさに名乗りで、立場を主張し、見合う待遇を期待し、勝ち抜くことを目指していた。つまりこの時期は、名乗りを軸に「故カエサル」利用と「故ポンペイウス」利用が相互に影響していたと思われる。

Ⅳ章では、前 36 年以後ローマ西方唯一の実力者となったオクタウィアヌスと、ローマ東方最大の実力者 M.アントニウスと同盟者クレオパトラの対立時において故カエサルが如何に利用されたのかを検討した。その際、カエサルとクレオパトラの子と言われるカエサリオンの扱いに注目した。クレオパトラは暗殺前も後も、息子を「カエサルの子」として利用した。M.アントニウスは対外的失敗とオクタウィアヌスとの関係悪化後にカエサリオンを認知・喧伝し、自らを故カエサルの子の保護者と位置づけた。同時に唯一のカエサルの子というオクタウィアヌスの依るべき基盤の弱体化を図った。対するオクタウィアヌスも彼等の認知後に、カエサル派有力者の協力の下、カエサリオン否定を開始するが、この度は主敵を外敵クレオパトラとして開戦に突き進んだ。戦時も公職の立場と西方の忠誠を強調する。しかし戦後処理や戦勝に関連させた神殿奉獻等、この戦いにはカエサル後継者争いが底流にあったことが窺える。この時期のオクタウィアヌスの故カエサル利用は、従来の主張を継続するが、カエサリオンの存在により守勢に立たされた。そのためカエサリオン否定と共に、従来以上に中傷や誇張等を用いて相手の正当性を弱めることを目指さざる負えなくなった。だが内乱終結・カエサリオン処刑により、唯一の神なるユリウスの子としての地位を確実なものとする。それは特に葬儀以来焦点となっていた神なるユリウス神殿や、カエサルの復讐が契機である復讐神マルス神殿等の事業を、当初の三人委員主導からオクタウィアヌス主導で、彼を称える形で奉獻されたことに顕著に見られる。つまり神格化後、再び出現した様々な利用を、神なるユリウスと、唯一の神の子オクタウィアヌス（及び彼の親族）による利用手段としての表象「故カエサル」に収斂したことを示している。

以上の考察から、暗殺から内乱終結・帝政草創期に、多くの人々・有力者による多様な「故カエサル」利用が出現したこと、一度三人委員の下で整理・統制されるが再度利用されたこと、更に利用されるだけでなく、利用者の行動を制限する要素も含んでいたことも見出された。そして渦中のオクタウィアヌスは折に触れて、様々な利用を取り入れながら故カエサルを利用し続けていた。特にその名乗りは神格化という契機、Sex.ポンペイウスの利用する表象と名乗りに刺激され、変化を遂げつつも定着していく。最後にカエサリオンとの「唯一の息子」を巡る争いに勝利した後、「下」からの運動も包括したカエサル神格化と神殿建立、名乗り、共和政の官職や権限による正当性主張、故カエサルを巡る競争者打倒で得た軍事的功績、他のカエサル所縁の計画掌握等、これらを唯一のカエサル後継者が掌握した時、そこには将来の「ローマ皇帝」像の核が形成されていたと言える。このように表象としての「故カエサル」とその利用を巡る動きこそが、生前のカエサルと初代皇帝アウグストゥスの間にある断絶を橋渡しするものであったと考えられるのである。